

〈附 編 2〉

豆州田方郡玉澤経王山妙法華寺境内絵図について

國學院大学大学院 栗木 崇

1 はじめに

本絵図は現地調査の期間中に、三島市玉沢に所在する経王山妙法華寺の館主小池政臣氏、同執事高田政人氏（現通猛寺住職）に聞き取り調査を行った際、その存在を知り、拝見させていただいたものである。今回、妙法華寺のご快諾を得、この資料を調査する機会を得た、記して感謝の意を表す次第である。

2 沿革

妙法華寺は日蓮宗四四本山の一つで、山号を経王山、本尊は十界互具大曼陀羅とする、当地方屈指の名刹である。以下簡単にその沿革をまとめると次のようになる。

弘安七年（1284）12月	日蓮の法弟日昭が鎌倉玉沢に創立。（異説有り）
康安元年（1361）	震災に遭い鎌倉材木座に移る
天文七年（1538）	兵火に遭い一時越後国村田妙法寺へ移る。
文禄三年（1594）	伊豆加殿（現修善寺字加殿？）に移る。
慶長八年（1603）	第14世日産、大木沢の地を得る。
年月不明	第15世日達、大木沢を玉澤と改称する。
元和七年（1621）11月	第16世日亮、現地玉沢に移る。
寛永二年（1625）	徳川秀忠より玉沢全地（80町歩）を朱印地として寄進される。
寛政三年（1791）	火災によりほぼ全山焼亡。鐘楼以外はその後再建。

3 絵図の伝来

絵図の寄贈者、太田松子氏（旧掛川藩主太田家）に伺ったところ、1966年に前当主太田資博氏が亡くなった際、遺品の整理中に発見されたもので、詳しい伝来は現在のところ不明である。発見時は折り畳んだ状態で封筒に入れられており、料紙の縁辺部の傷みもひどかったようである。太田氏の話では東京大空襲の時、蔵が焼失しており、絵図はその際焼け残ったもので、他に関連する資料などは失われてしまったのであろうということである。その後、妙法華寺の絵図だからということで、妙法華寺に寄贈されたとのことである。額装はその後寺側で行われたようである。また、妙法華寺では寄贈時から現在までの間に館主が代替わりをされていて、絵図の詳しい来歴をお聞きすることができなかった。

4 料紙・体裁

まず、絵図の描かれている料紙からみていくことにする。絵図は現在額装されており、額の内側の寸法はタテ×ヨコ211×168.5cmを測る。また、絵図は複数の料紙をつないだものに描かれており、基本的な料紙一枚の大きさは40.5×28.5cmで6×6の36枚を数える（第3図）。上下左右の端は切り詰められており、そのことは下方の「葦山下田道」の文字が半裁されているなど画像からも読みとれる。太田氏に伺ったような、縁辺部に大きな傷みは確認できないことから、額装時に切り詰められたのであろう。次に料紙の貼り合わせをみるとタテ行は下の紙を上を重ね、ヨコ列は右2列は左が上、左4列は右が上となるように貼り合わせている。このことから料紙の貼り合わせはまずタテ行をつなげ中央2列のどち

らかを軸にヨコ列をつないでいったと考えられる。また、絵図に描かれた道で料紙の境目の所には朱印が確認でき、料紙の貼り合わせの段階で道の位置を確定していたと考えられ、絵図の性格をしめす重要な手がかりである。

5 文字情報

まず目に付くのが同筆と思われる右下に書かれた「豆州田方郡玉澤経王山妙法華寺境内絵図」と四隅に書かれた東西南北の文字である。これらの文字は、他の文字に比べ墨書が際立ってはっきりしている。また、絵図の四隅に東西南北を配置することはあまり例のないことや、額装時に切り詰められる以前の構図のバランスから考えて、額装時を含めた後筆の可能性を考えるべきであろう。

次に「豆州田方郡玉澤経王山妙法華寺境内絵図」の左側に書かれた文字である。

「安政六己未年10月玉沢妙法華寺江

申談総山並総

御廟所絵図都合貳枚外

御石碑明細書一冊差越之」*文字は現代仮名遣いに改めている。

この注記から安政六年（1859）10月に総山絵図と御廟所絵図2枚と御石碑の明細書1冊を妙法華寺側に差し出させたということが言える。その主体は大檀家である太田家と考えるのが普通であろう。しかしながら、上述のように伝来が不明なことから、この絵図が総山絵図、総御廟所絵図のどちらかにあたるのか、別物なのか、また、残りの絵図、明細書については、現在不明である。よって、この絵図の作成目的、意図は現段階では現存の絵図から判断しなければならない。

その他、図像に付随する文字注記は第2図の各番号の位置に表1に示した文字が記されている。

6 図像情報

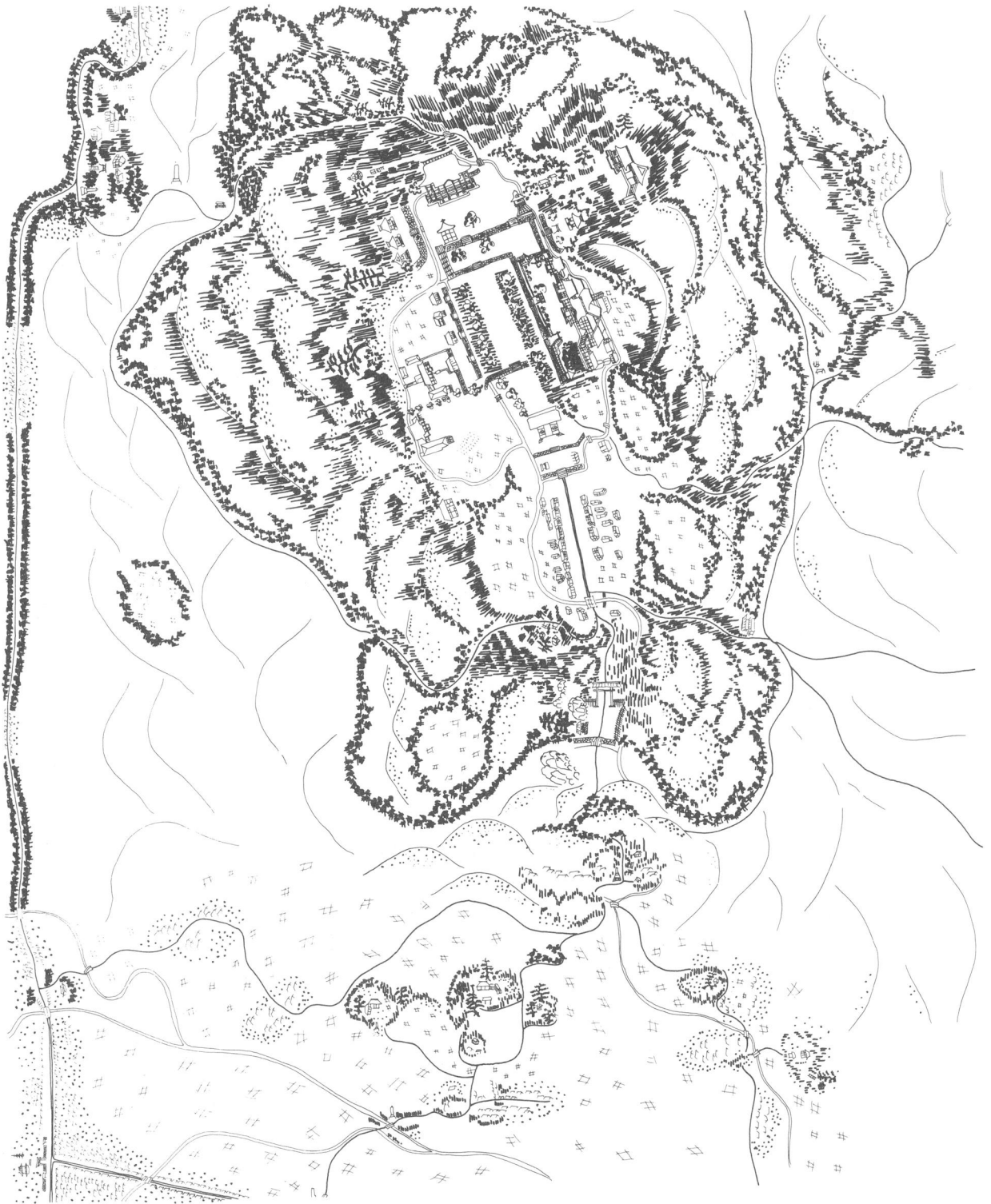
次に描かれた図像の考証に移るが、まず、全体の構図の概観から始める。一見して絵図の中央上部を惣門から奥にむかって左側に屈曲するように寺の伽藍が占め、その外側を松樹がめぐり、およそ絵図の面積の半分を占める。以後、この範囲を境内内空間と呼称する。さらにその外側の山下空間に三島宿や村落が配置されるが、そのほとんどが、やはり松樹や、針葉樹、点描等の表現により囲われている。それらを結ぶ道は比較的地形図に対応するように描かれているが、絵図左端の東海道は三島宿から妙浄寺前の宝塔まで直線的に描かれている。また、道は一部山稜線や樹木表現に隠れ、山谷の地形を表現している。

個別の図像表現に注目すると講堂から二王門に到る境内の建築物は立体的に細部にわたるまで細かく描かれており、写実的である。立体画像は門前百姓や一部の寺社に見受けられるが、全体の傾向として境内から離れるに従い、図像が粗雑になる。境内内空間の外側では、妙法華寺の末社内でも立体画像、平面画像の双方があり、また、長泉寺や三嶋明神は立体図像であり、末社とその他の社寺とを明確に描き分けてはいない。ただ、一般集落は屋根だけの簡略な表現で共通している。また、末社は「豆州志稿」で確認できる寶塔山妙行寺等が記載されていないなど、絵図の図像の範囲内にあるもの全てを描いているわけではない。絵図に描かれた地物は境内内の社殿、僧坊、宝塔や代官制札を除けば、概ね現存、もしくは現地比定できる（第4図）。

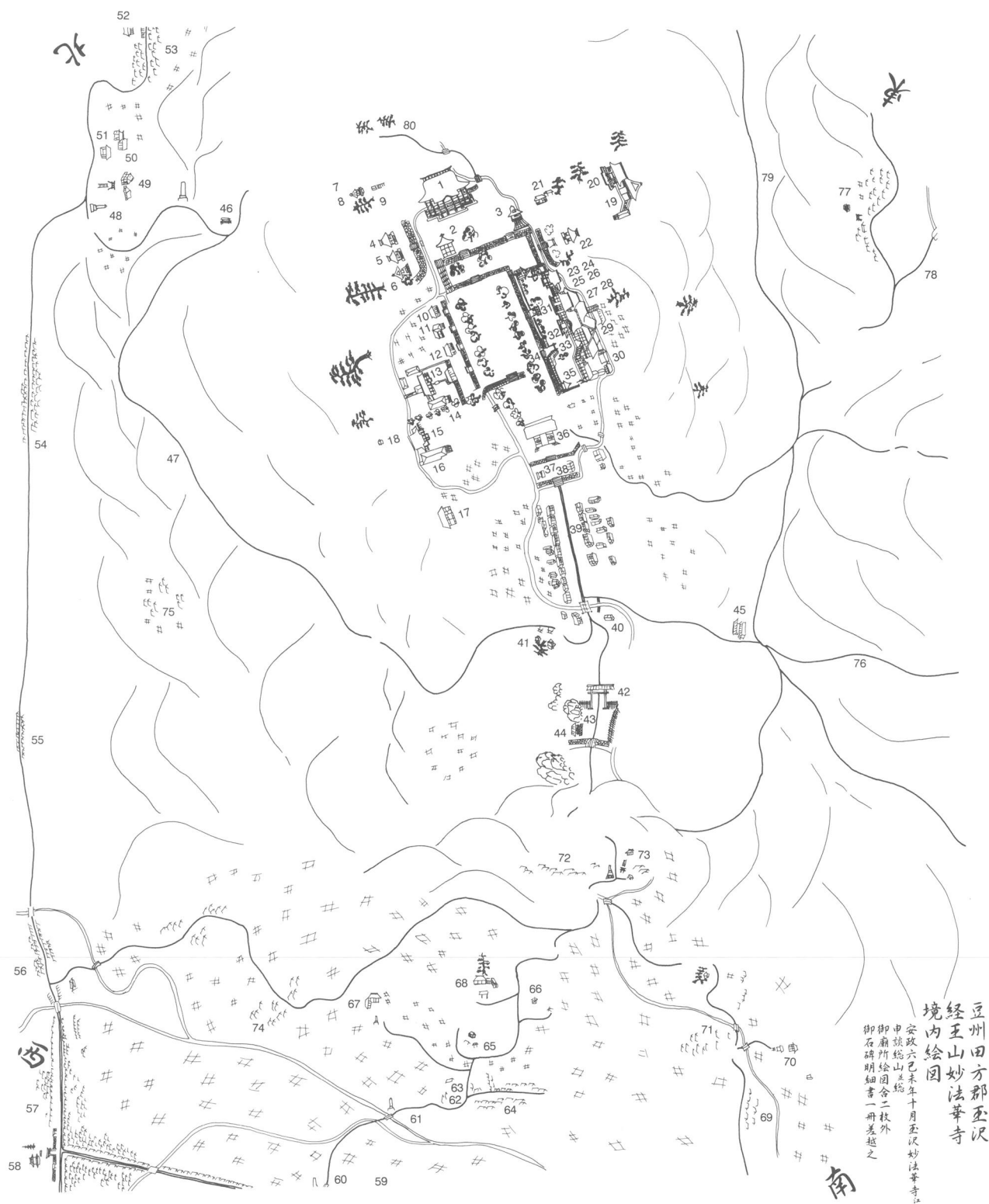
7 考察

以上、絵図について観察所見を述べてきたが、いくつかの気になる点をまとめてみたい。

まず、非常に気になるのが境内内の図像の軸線が曲がっていることである。それと対照的に東海道が



第1図 境内絵図トレースその1

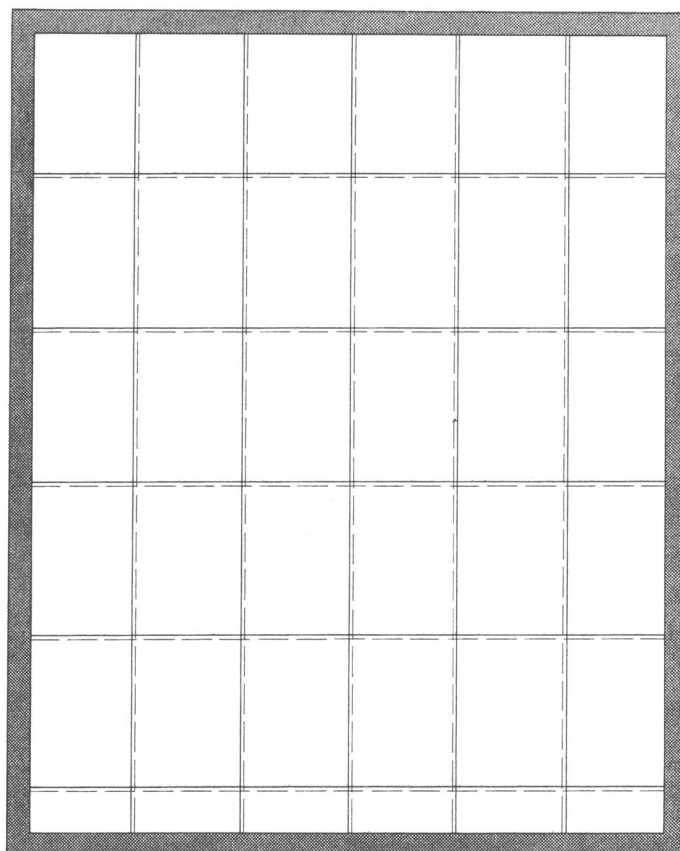


第2図 境内絵図トレースその2

表 1 境内絵図文字注記

No.	文字注記	No.	文字注記	No.	文字注記
1	本堂	41	山神	61	イキサハ川
2	経蔵	42	惣門	62	玉沢末 妙音寺
3	鐘楼	43	立石	63	玉沢末 妙源寺
4	千仏堂	44	御代官制札	64	谷田村
5	三光堂	45	御代官制札	65	山伏
6	供鐘	46	御代官制札	66	天神社
7	当山ノ八角堂歴代廟	47	牛馬道	67	玉沢末 受法寺
8	祖師開山三祖ノ廟	48	玉沢末 妙浄寺	68	禅宗 長泉寺
9	御廟所	49	七面社	69	中村
10	覚源坊	50	セツタイ	70	玉沢末 妙泉寺
11	唯本坊	51	玉沢末 法善寺	71	夏梅木村
12	圓融坊	52	玉沢末 松雲寺	72	竹倉村
13	閑居□	53	三ツ谷新田	73	玉沢末 通猛寺
14	覚林院	54	市ノ山新田	74	小山村
15	本堂	55	塚原新田	75	阿辺野村
16	庫裏	56	川原ヶ谷村	76	葦山 修善寺 下田道
17	実相坊	57	三島宿	77	熱海 寝船川道
18	イナリ	58	三島明神	78	桑原村
19	奥ノ院	59	葦山下田道	79	山中新田 箱根道
20	客殿	60	玉沢道	80	箱根市ノ道
21	教順坊				
22	□神社				
23	祖師堂				
24	太鼓				
25	客殿				
26	書院				
27	座鋪				
28	座鋪				
29	土蔵				
30	土蔵				
31	客殿門				
32	玄関				
33	庫裏				
34	方丈門				
35	土蔵				
36	二王門				
37	制札				
38	下馬				
39	門前百姓				
40	安立坊				

注) 表記はすべて現代仮名遣いに改めている。□は判読不明の文字。



第3図 寸法・料紙



直線的に描かれており、東海道と軸として描いたことは理解できる。しかし、地形図と比較すると東海道と玉沢道はほぼ平行しており、東海道を軸としたことだけで境内の軸が屈曲する理由とするには不十分である。妙法華寺には第25世日宗の代、享保六年～十三年（1721～1728）に作成とされるの「玉澤境内圖」が存在しており、今回は写真でしか確認できなかったが、絵図の左側に直線的が東海道に描かれ、境内内空間が安政絵図よりさらに大きく左に屈曲する構図を持つ。安政の絵図は享保絵図を参考にして描かれたということが推測できるが、何故2つの絵図に共通してこのような構図がとられたことについては一考を要する。それについては、今のところ玉沢道から妙法華寺境内へ入山する際の知覚的な印象によるものではないかと考えている。絵図をもとに竹倉から妙法華寺へ向かって現地踏査した際、門前の集落から山門、境内にかけて左側に曲がるような印象を持った。また、周辺集落の配置、それらを結ぶ道の表現も明治20年「三島宿」と比べて見ると、絵図に描かれた道の屈曲がデフォルメされているが、地形図の道の特徴と合致しており、とてもよくその特徴を捉えている（第4図）。そうした道の表現や料紙の張り合わせ段階から道の位置を確定していたことを考えると図像の空間的位置関係を重視した絵図といえよう。しかしながら、厳密な測量を行って描いたわけではないので、このような境内内空間の軸線が屈曲する構図で描かれたのではないだろうか。

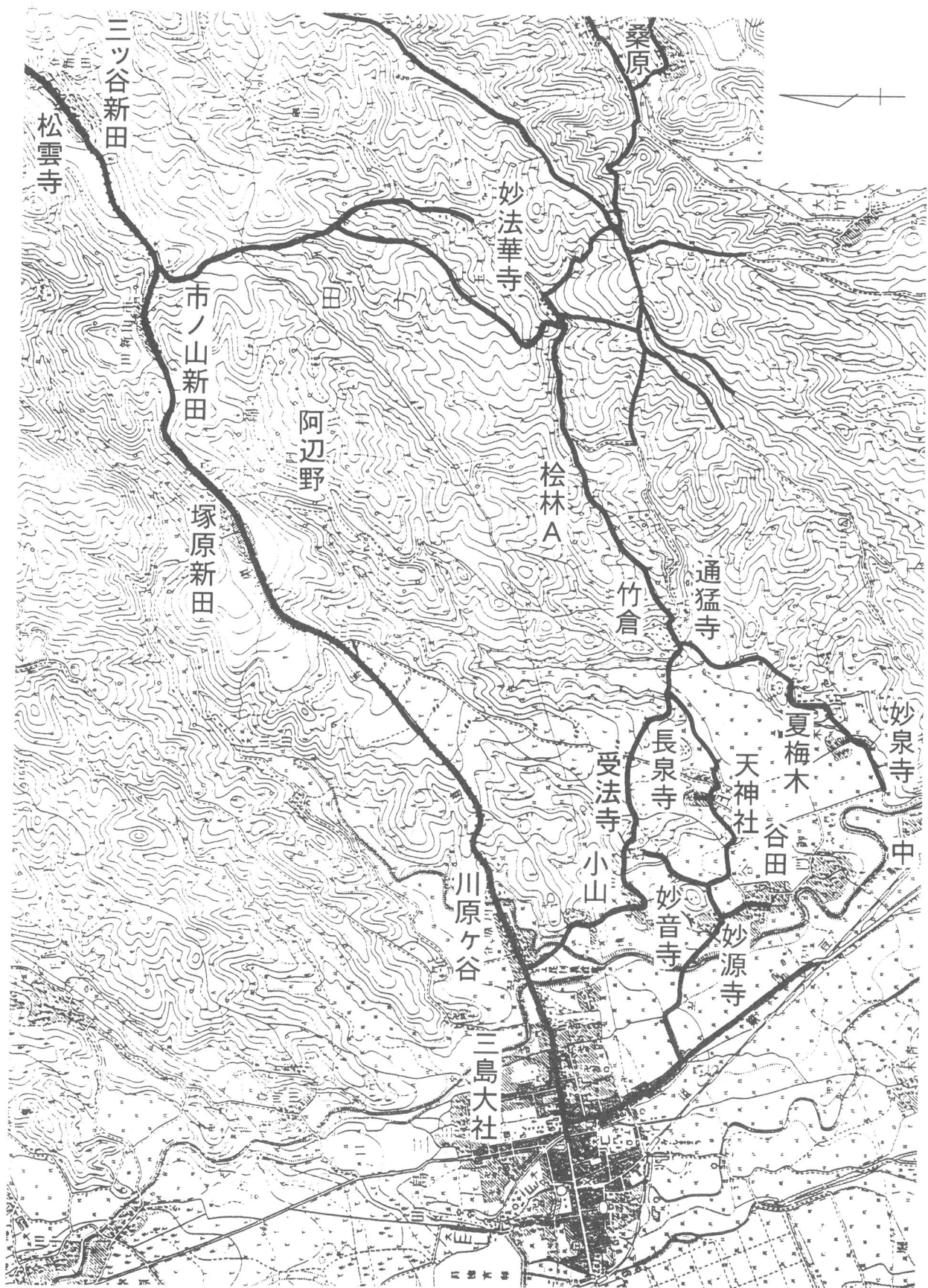
一方で、境内内空間は聖域としての閉ざされた空間を示している。一般に濃密な樹木表現は聖域を表すことが多い。樹木による囲い込みは、その他の社寺、集落、耕作地などでも見受けられるが、密度の違いは一目瞭然である。また、道、宝塔、御代官制札も同様に空間を区切る役割を果たしており、特に御代官制札がすべて境内内空間と外の境界に位置することは興味深い。

最後に、この絵図が総山絵図なのか総御廟所絵図なのか、前二者とは別物なのか、一応の結論を出しておく。まず、総山絵図と考えた場合、上述のように、絵図の上方の大部分を境内を松樹で囲われた空間が占め、宝塔、御代官制札のランドマークにより山下の空間と区別されており、ひとつの閉ざされた空間を構成している。このことから「総山」というものを意識してこの絵図が描かれているとみてよいであろう。一方、御廟所絵図と考えた場合、御廟所は講堂の左に一つ描かれているにすぎず、文字注記にしてもそこに「当山の八角堂歴代廟」「祖師開山三祖の廟」「御廟所」と描かれているにすぎない。どちらにも当てはまらない、とする積極的な理由が見いだせない以上、現状では総山絵図として描かれたものとして考えるのが妥当と思われる。

8 おわりに

今回、原資料にあたったのは安政年間の絵図のみに過ぎず、また安政の絵図自体の考察も絵図研究の門外漢の筆者の力量もあって十分な検討が行われたとは言えない。絵図については上述の享保年間の絵図の外、明治20年代の絵図も存在しているらしく、また、文献資料では第四十四世日能による嘉永六年（1853）の過去帳、第三十三世日通による18世紀中葉の「玉沢手鏡草稿」、建物の棟札の一部が存在しているらしいが、それらの内容は、いまだ十分な検討はなされていない。それらの内容の比較検討により、妙法華寺の変遷が明らかになろう。特に享保絵図と安政絵図の間の享保三年（1791）に火災によって鐘楼以外の堂社は焼亡したといわれており、その後の堂社の再建などは、文献資料の記録とあわせて検討することにより、具体的に明らかにできると思われる。妙法華寺はその規模、徳川氏、太田氏などの政治権力とのつながりから、近世を通じて当該地域の大寺社権力であったことは容易に想像できる。妙法華寺の変遷が明らかにされることは当地域の近世の様相を知る大きな手がかりになろう。

小稿作成にあたっては國學院大学教授吉田敏弘先生、同大学院地図学研究Ⅰ受講生の諸氏に貴重なご意見をいただいた。記して感謝の意を表したい。



第4図 現地比定図（明治20年「三島宿」より作成）

〈参考文献〉

- 三島市誌編纂委員会 1968(復刻1980) 『三島市誌 上巻』 三島市
三島市誌増補版編纂委員会 1987 『三島市誌 増補』 三島市
秋山富南著 萩原正平・萩原正夫増訂 萩原民治・戸羽山瀚編 1936 『増訂豆州志稿』
友野 博 1983 「妙法華寺調査報告」 三島市教育委員会
宮脇泰一 1983 「妙法華寺鐘楼調査報告」 三島市教育委員会
葛川絵図研究会編 1989 『絵図のコスモロジー』下巻 地人書房
小山靖憲・下坂 守・吉田敏弘編 1997 『中世荘園絵図大成』第1部・第2部